

栗東市農業振興基本計画 骨子（案）～現況及び課題、農業振興の方向性等～

資料3
第2回基本計画等策定委員会
2021.02.18

栗東市の100年先を見据え、人と農業・農地が調和し、豊かな暮らしを享受できる『農業を通じた持続可能な社会』の実現を目指します。その先駆となる今後10年間の将来像及び基本方針・目標等を以下と設定します。

<p>現況及び課題</p> <p>※統計データからみる栗東市農業及び各種調査結果（アンケート、ヒアリング等）、第1回委員会意見等より抽出</p>	<p>目指す将来像</p> <p>みんなでとりくみ 未来へつなぐ、安心して元氣な暮らしを育む栗東の農業</p>	<p>栗東市農業の強み・弱み</p> <p>農業、農地を取り巻く社会的潮流（外的要因） <機会（追い風）> <脅威（向かい風）></p>	
<p>基本方針・目標</p>		<p>基本施策等</p>	
<p>1. 農作物</p> <ul style="list-style-type: none"> 本市の主要作物は水稲及び野菜であり、その他麦類も栽培している。 作付面積は約576ha（2015年）、うち水稲が6割を占め、次点の麦類と合わせて8割を占める。 作付面積は減少傾向が続く。水稲の減少が顕著であるが、野菜は増加傾向がみられる。 栗東市の特産品は「イチジク」「米」「軟弱野菜」などであるが、若い世代への認知度は低い。 特産品として新たな品種等を導入するよりも、今あるものを活かし、より高めていくことが重要との意見もある。 全国に誇る農産物がないなど、農業自体の魅力に乏しいとの意見が市民から挙げられている。 販売事業者等の立場からは、地元農産物は出荷量・品目・品質が安定せず、端境期の対応を含めて手が出しづらい状況である。 	<p>農作物・農業経営</p> <p>稼げる農業、誇りを持てる農業の確立</p> <p>①農作物供給の安定化、高品質化の環境整備 ②営農意欲の向上と持続性の確保に向けた生産者支援 ③『栗東農業』の発信力及び販売力の強化</p>	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 米の安定的な生産 野菜（軟弱野菜等）の生産に適した土地 特産品（イチジク等） 直売所等が市内3箇所に立地 	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> 全国規模の農産物がない 地元農産物でも市民の認知度は低い 地元農産物の安定的な供給体制が整っていない
<p>2. 農業経営</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業産出額は15億円前後で推移しており、全産業の総生産額の1%未満に留まる。 市内産業として農業の占める規模（生産額ベース）は概ね平均的（県内市町との比較）である。 農産物の出荷先は農協が大部分を占めているが、近年は消費者への直接販売も拡大している。 特産品であるイチジク等であっても、その消費は県内にとどまっておらず販路が硬直化している。 認定農業者が他市町と比べ少ない。 規模の小さい農家が多く、また法人化も進んでいない（全国及び県に比して低い法人化率）。 	<p>農地</p> <p>地域特性をいかした農地の確保と有効利用の推進</p> <p>①農地利用の最適化の推進 ②農業が持つ多面的機能の維持向上 ③多様な担い手の連携、協力による農地の管理、活用推進</p>	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 大都市圏近郊に位置する 農協（JA）広域合併による販路の拡大が期待される 	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> 多様な農業経営の展開（専業化、複合化等） 農業経営の効率化の促進（共同化、法人化等） スマート農業の普及促進
<p>3. 土地利用、農地</p> <ul style="list-style-type: none"> 市域には平地が少なく、農地の規模を確保できる地域は限られる。 経営耕地は市全体で減少傾向にある。 耕作放棄地は過去10年間で約1.8倍に増加しており、市南部の中山間地域に比較集積している 遊休農地等を耕作していない理由として、耕地条件の悪さや担い手の高齢化等が挙げられている。 土地持ち非農家には後継者不在が多く、今後これら所有する農地の管理不足が進むことが懸念される。 鳥獣害が拡大しており、特に中山間地域では農業の継続に困難をきたす状況も見受けられる。 農業生産基盤については、一定整備が完了/事業中であるものの、耕地条件の改善や農道整備など、地域ごとに様々な課題が依然残されている。 都市（市街地）と農地が近く、市街地の開発との調整等が求められる。 まちなかに農業・農地が存在することについて、市民からは肯定的な意見が多数を占める。 	<p>担い手</p> <p>栗東市農業の未来を託す多様な担い手の確保・育成</p> <p>①新規就農者及び後継者等の支援・育成 ②次代の担い手づくりの推進</p>	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 災害が少なく比較的温暖な気候 農業生産基盤の整備は概ね完了している まちなかに農業・農地が存在することが市民の暮らしに潤いや安らぎを与えている 	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> 農地としての適地（規模）が少ない 耕作放棄地は増加傾向にあり、鳥獣害も増えている（特に中山間地域） 市街地の開発圧力は依然高く、まちなかの農地として有効活用が図られていない
<p>4. 農家、後継者</p> <ul style="list-style-type: none"> 本市の人口は約7万人（2020年）であり、今後も当面は増加傾向が続く見込みであるものの、高齢化が進み、市内各地で高齢化率は将来3割を超える（2045年）と予測される。 第1次産業就業率は全産業の2%程度に留まり、全国や滋賀県と比較して低い割合となっている。 農家は一貫して減少傾向にあり、特に第二種兼業農家の減少が顕著である。 農家の約8割が60歳代以上となり、今後さらに担い手の高齢化が進行することが懸念される。 農業従事者のうち約4割が「農業を縮小したい／やめたい」と考えており、その理由として高齢化や後継者不足等を挙げている。 農業従事者にとって、担い手の確保・育成が最も重要な課題として認識されているものの、新規就農者支援の取組等は限定的なものにとどまっている。 地域の農業振興のリーダーとなるべき人材が不足している。 農業に興味を持つ子どもたちに対する段階的かつ継続的な担い手確保・育成の取組が必要。 	<p>連携・交流</p> <p>市民等とともに創る農のあるまち</p> <p>①都市と農村の交流の活性化 ②農と連携したまちづくり、コミュニティづくりの推進 ③農村文化の継承と新たな魅力づくり</p>	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口は増加傾向が当面継続する 大都市圏からの交通アクセスがよい 農業に興味を持つ子どもたちなど潜在的な担い手の層が存在する 	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業従事者の高齢化が進んでいる 高齢化や後継者不足を理由に農業の縮小/廃業を考える農業従事者が多い 次代のリーダーとなるべき人材が不足している
<p>5. 市民理解、交流</p> <ul style="list-style-type: none"> 地元農産物は、「新鮮」「安心」等との理由で市民によく購入されている一方、購入場所が分からないため購入できないとの意見がある。 栗東市の特産品について若い世代の認知度は低い。 栗東市の農業のイメージとして「都市と農業の共存」が市民に認知されている。 市民にとって、農業を身近に感じることができる取組に対する関心が高い。 農業従事者の市民農園等の貸し出しに対する関心は高いものの、実際に貸し出されている農地は限られている。 地産地消の取組への農業従事者の参画はごく一部にとどまる。 生産者と消費者が直接触れ合える機会が少ない。 棚田の保全活動（走井地区）など、地域住民やボランティア等が協働で取り組んでいる。 	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 市街地に多くの市民が暮らす 農業に関心、理解のある市民が多い 大都市圏からの交通アクセスがよい 美しい棚田景観等が住民等の努力で守られている 	<p>弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> 農に関するPRや普及啓発が不足している 生産者と消費者をつなぐ機会や場がない 地産地消等の取組は限定的 	<p>強み</p> <ul style="list-style-type: none"> 観光資源としての農地、農産物の活用 （再掲）市街地農地の有効活用 市民、都市住民等と取り組む農村景観、農村文化の保全、再生